

[書評論文]

Gunter Senft (著)、石崎雅人・野呂幾久子 (訳)
『語用論の基礎を理解する』

東京：開拓社，2017. xviii + 305p. ISBN978-4-7589-2246-3

堀 江 薫
名古屋大学

本書『語用論の基礎を理解する (*Understanding Pragmatics*)』(以下、『語用論の基礎』)は、マックス・プランク心理言語学研究所、言語・認知部門 (Language and Cognition Department) 上級研究員のグンター・ゼンフト (Gunter Senft) 氏による語用論の概説書 (Senft, Gunter. 2014. *Understanding Pragmatics* (Understanding Language series). Oxford: Routledge. (233pp.)) である。ゼンフト氏は、パプアニューギニア、トロブリアンド諸島の言語、特にキリヴィラ語 (Kilivila)、および同地域の文化のフィールドワークに基づいた人類言語学的研究で国際的に著名な研究者である。ゼンフト氏の研究の射程は広く、人類言語学、語用論、意味論等の分野に跨って、言語・文化・認知の相互関係を考究した多数の著書、論文がある。ゼンフト氏の著作の中で、人類言語学、言語類型論、認知言語学等複数の学問分野に対して重要な貢献をなしたものとして編著 *Systems of nominal classification* (2000, Cambridge UP) がある。同書は、オーストラリアやアマゾン地域の諸言語、バンツァー諸語、マヤ語、日本語等のデータに基づいて類別詞、名詞類、ジェンダー体系などの文法的手段が名詞の下位分類においてどのような機能を果たし、それらを使用する母語話者の外界の知覚 (カテゴリー化) に関してどのような示唆を与えるかを論じた10本の論文から構成されている。

ゼンフト氏は2016年12月に日本語用論学会年次大会の基調講演者として来日し、大会会場校の下関市立大学および名古屋大学において講演を行った。ゼンフト氏は語用論の分野において国際語用論学会 (International Pragmatics Association, IPrA) 学会の学会誌 *Pragmatics* の編集長や人類言語学の双書 *Culture in Language Use* (John Benjamins publishing company) の編集主幹を務めるなど国際的に認知されている。

本書評論文の目的は、『語用論の基礎』の構成を紹介した上で、これまでの語用論分野の定評のある概説書との比較を通じて、同書の特長を示すことにある。『語用論の基礎』の構成は以下のとおりである。なお、後の比較のため原著の各章の表題も併記する。

序章

第1章 語用論と哲学—我々は言語を使用するとき、何を行い、実際に何を意味するのか：言語行為論と会話の含みに関する理論—

(1. Pragmatics and philosophy: What we do when we speak and what we actually mean—speech act theory and the theory of conversational implicature)

第2章 語用論と心理学—直示参照とジェスチャー—

(2. Pragmatics and psychology: Deictic reference and gesture)

第3章 語用論と人間行動学—コミュニケーション行動の生物学的基盤—

(3. Pragmatics and human ethology: Biological foundations of communicative behavior)

第4章 語用論と民族誌学—言語・文化・認知の相互関係—

(4. Pragmatics and ethnology: The interface of language, culture and cognition)

第5章 語用論と社会学—日常における社会的相互行為—

(5. Pragmatics and sociology: Everyday social interaction)

第6章 語用論と政治—言語、社会階級、人種、教育、言語イデオロギー—

(6. Pragmatics and politics: Language, social class, ethnicity and education and linguistic ideologies)

第7章 語用論を理解する—まとめと展望—

(7. Understanding pragmatics: Summary and outlook)

従来の語用論の概説書は語用論の主だったテーマ別の章立てになっているものが主流であった。例えば、語用論の概説書の嚆矢と目されるスティーブ・レビンソン (Stephen C. Levinson) の *Pragmatics* (1983, Cambridge UP; 安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社、1990年) は以下のような構成になっている。

1. The scope of pragmatics
2. Deixis
3. Conversational implicature
4. Presupposition
5. Speech acts
6. Conversational structure
7. Conclusions

これ以後の定評のある概説書にも同様のテーマ別の章立てを採用しているものが多い。例えばヤコブ・メイ (Jacob L. Mey) の *Pragmatics: An Introduction* (1993, Blackwell; 澤田治美訳『ことばは世界とどうかかわるか—語用論入門』ひつじ書房、1996年) も以

下のようなテーマ別の構成となっており、著者の関心を反映し、発話行為や会話分析に多くのスペースが割かれている。

Part I: Basic Notions

1. Introduction
2. Why Pragmatics?
3. Defining Pragmatics
4. Pragmatic Principles

Part II: Micropragmatics

5. Reference and Implicature
6. Speech Acts
7. Speech Act Verbs and Indirect Speech Acts
8. Speech Acts and their Classification

Part III: Macropragmatics

9. Introduction to Macropragmatics
10. Conversational Analysis: Basic Notions
11. Conversational Analysis: Part I
12. Conversational Analysis: Part II
13. Metapragmatics
14. Societal Pragmatics

比較的最近出版された概説書である Yan Huang の *Pragmatics* (2007, Oxford UP) も第一部に関しては同様のテーマ別の構成を取っており、第二部は著者の関心を反映し、語用論と認知、意味論、統語論とのインターフェイス現象を扱っている。

1. Introduction

Part I Central topics in pragmatics

2. Implicature
3. Presupposition
4. Speech acts
5. Deixis

Part II Pragmatics and its interfaces

6. Pragmatics and cognition: relevance theory
7. Pragmatics and semantics
8. Pragmatics and syntax

『語用論の基礎』は、これら従来の語用論の概説書とは一線を画するいくつかのユニーク

な特長を有している。ゼンフト氏は、「言語学における語用論は哲学、心理学、動物行動学、民族学、社会学、政治学のような他の学問分野と関連するとともにそれらの学問分野に先駆がある」(p. 4; 下線は評者による)という認識に立ち、「語用論が言語学の中で本来的に学際的であるだけでなく、社会的行為に対する基本的な関心を共有する人文科学の中のさまざまな領域を結びつけ、相互に影響し合う「超域的な学問」であること示す」(p. 4)という目標を掲げる。

ゼンフト氏は、『語用論の基礎』全体をつらぬく以下の3つの基本的な考え方を導入する。

- (1) 言語はその話者により社会的な相互行為において使用される。言語は何よりもまず社会的なつながりや責任関係をつくる道具である。手段は言語や文化によって異なる。(p. 5)
- (2) 発話はそれがなされる状況のコンテキストの一部であり、本質的に語用論的な性格をもつ。(p. 5)
- (3) 語用論は言語使用における言語・文化特有の表現形式を研究する超領域的な学問領域である。(p. 5)

これらのうち(1)(2)はゼンフト氏の長年のトロブリアンド諸島の言語・文化のフィールドワークに基づく洞察であり、(3)は、ゼンフト氏が長年に渡って関わってきた国際語用論学会(IPrA)がまさに体现している語用論の本質である。

その上で、ゼンフト氏は、上記6つの領域によって先駆的に導入された語用論の中核的なリサーチクエスチョンを、学史的な俯瞰を提示しつつ議論するというアプローチを採用している。具体的には、各章を「語用論へ問題を導入した1人以上の著名な学者の説明から始め」(p. 5)、次いで「その問題の内容と語用論における最新の展開を複数の言語・文化の観点から説明する」(p. 5)という周到な手法を取っている。これによって、語用論の重要な研究課題が(語用論以前に)どのように関連先行分野(例: 哲学、心理学、民族誌学、社会学)で接近されてきたかという確かな学史的な見通しが得られ、さらにそれが現在の語用論研究においてどのように取り扱われているかという最新の展開についても知ることができる。学史的な見通しと最先端の展開のレビューを一つの章の中で融合させるのは必ずしも容易なことではないが、『語用論の基礎』においてはその試みが成功している。

第2章と第5章を例に見てみよう。第2章では、直示という言語現象の研究の歴史的先駆者としてドイツの心理学者のカール・ビューラー(Karl Bühler)に遡り、言語学分野における直示研究のパイオニアであるフィルモア(Charles Fillmore)の定義の紹介を経て、マックス・プランク研究所でレビンソンが主導した空間参照枠(frames of spatial reference)の研究プロジェクトの概要を紹介し、最後に自ら行ったキリヴィラ語における

空間直示について詳細に論じている。さらに、本章では、これまでの語用論の概説書では必ずしも中心的に取り上げられなかったジェスチャー研究についても多くの紙幅が割かれている。ジェスチャー研究に関しても、先駆者ヴァイルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt) に遡り、ケンドン (Adam Kendon)、マクニール (David McNeill)、ゴールドイン-メドウ (Susan Goldin-Meadow) というジェスチャー研究のバイオニアの業績を紹介した上で、以前のゼンフト氏の同僚であり、現在のジェスチャー研究を国際的に牽引している喜多壮太郎氏の研究の紹介に及んでいる。

第 5 章では、相互行為研究の先駆者としてのゴフマン (Erving Goffman) の社会的相互行為研究、ガーフィンケル (Harold Garfinkel) のエスノメソドロジー研究、サックス (Harvy Sacks) の「会話分析」研究を概観した後、2015 年の語用論学会大会の基調講演者であったエンフィールド (Nicholas J. Enfield) やスタイバース (Tanya Stivers) がマックス・プランク研究所において主導した通言語比較会話分析プロジェクトの研究成果を紹介している。同研究は、堀江 (2016) でも言及した「語用論の類型論 (pragmatic typology)」という萌芽的研究分野につながっていくものである。

また、第 7 章の結論では、ウィリアム・ハンクス (William Hanks)、井出祥子、片桐恭弘らによって、「分析概念が文化に埋め込まれていることに的確に焦点をあて、理論構築や実証的研究において言語使用に関する特定の非西洋的概念を自覚的に適用する」(p. 258) ことを目指した「解放的語用論 (emancipatory pragmatics)」の基本的な考え方が紹介されている。このように、古典的な研究から現在進行中の最先端研究までの幅広い見通しが得られ、現在第一線で研究している研究者たちの動きが活写されているのも本書の魅力である。

もう一つの本書の特長として、これまでの語用論の概説書の多くが免れなかった「英語データバイアス」を自然な形で克服している点があげられる。語用論の現象の表象に言語、文化によるバリエーションがあることからすれば、先に紹介した 3 つの概説書のうち、レビンソン、メイのものはいずれも (評者の通読した限り) データ (例文) はすべて英語のものである。最後の Huang のものは、英語の例文がやはり過半を占めているが、発話行為 (4 章)、直示 (5 章)、語用論と統語論 (8 章) の各章において英語以外の様々な言語の例文を積極的に先行研究から引用している点は評価できる。ただし、『語用論の基礎』は積極的に多様な言語データを用いて語用論現象を例示していこうというオリエンテーションがさらに徹底しており、英語の語用論的現象は諸言語の一つとして相対化されている。ゼンフト氏自身のトロブリアンダ諸島でのフィールド調査から得られた一次資料が、調査時のエピソードとともに効果的に配されている点も、これまでの類書に見られない特長である。

最後に、レビンソンの *Pragmatics* の出版から約 30 年を経て、新たに、大きく異なる通言語・通文化的オリエンテーションを有する優れた語用論の概説書が、レビンソン氏と

同じ研究所、部門に属する著者によってもものされたのは偶然であろうか。両者はいずれも豊富なフィールドワーク経験に基づき、言語・文化・認知のインターフェイスにおいて見られる興味深い現象（例：空間把握、名詞の下位分類に反映したカテゴリー化）を研究してきた人類言語学者である。ゼンフト氏も引用しているウィリアム・フォーリー (William Foley) の著書 *Anthropological Linguistics* (1996, Blackwell) によれば、「語用論と人類言語学、社会言語学との間に境界をひくのはいまのところ不可能」(原著 p. 27, 『語用論の基礎』 p. 143 に引用) であり、人類学者が優れた語用論的洞察の提供者であった例はマリノフスキー (Bronislaw Malinowski) の「交感的言語使用 (phatic communion)」の研究をはじめ枚挙にいとまがない。このように考えると、優れた語用論の概説書が二人の傑出した人類言語学者の手によって生み出されたことは偶然ではない。

評者はゼンフト氏とこれまで国際語用論学会のパネルや、ともに参加している科学研究費の共同研究プロジェクトを通じて交流があり、昨年は語用論学会大会の基調講演者としてのゼンフト氏の招聘計画の一端を担った。その経験から、氏は真摯で信義に篤い骨太な知識人という印象がある（氏は基調講演者としての「書下ろし」の依頼原稿を異例の早さで提出され、本誌編集長を感激させたと聞く（直話））。文は人なりというが、『語用論の基礎』の本文および行間には、ゼンフト氏がトロブリアンド諸島の人々との間で長年に渡って積み重ねてきた豊かな相互交流の蓄積が垣間見え、本書のいわば隠し味になっている。初学者はもとより、語用論の概説書は既に何冊も読んでいるという手練れの読者にもぜひ本書をお勧めしたい。

参考文献

- 堀江薫. 2016. 「対照語用論」加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブック』、133-157. 東京：ひつじ書房.